



Title	グローバル社会における異民族間の共生と民族宗教のダイナミズム : 東アジア社会の華人ネットワークの再編成 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	翁, 康健
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第15983号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92290
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kangjian_Weng_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 翁 康健

学位論文題名

グローバル社会における異民族間の共生と民俗宗教のダイナミズム
—東アジア社会の華人ネットワークの再編成—

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、グローバル社会において越境した華人とホスト国の地域住民たちが、持ち込まれた宗教文化と土着の宗教文化をどのようにハイブリッド化し、地域コミュニティや住民のニーズを満たす儀礼や祭礼を創始したり、個人のエスニックなアイデンティティに働きかけたりしているのかを明かにすることである。著者は特に華人の民俗宗教（folk religion）に着目し、生活文化に溶け込んだ家族や地域の祭礼が、ホスト国においてどのように維持され、華人のエスニシティを強く意識化しない第二世代以降の人々が継承していくのかに着目している。視点としては、地縁・血縁に根ざした民俗宗教が華人としてのエスニックな境界を越えてホスト社会に適応するのか、ホスト社会の制度宗教と葛藤しながら共生空間を新たに創出しているのかというところを分析の主眼としている。具体的に、調査は2016年から2023年までに、中国福建省の祖廟祭祀、日本の神戸における普度勝会、タイ中部と南部における菜食実践、およびマレーシアの華人ムスリムについてフィールドワークを行い、4つの事例研究としてまとめている。

・本論文の内容

本論文は全6章で構成されている。全体は第1章が問題の提示と理論的考察、第2章から第5章までが4本の事例研究の提示、第6章が研究の要約と課題の提示、結論部分となっている。

第1章において、従来の研究はグローバル社会におけるホスト社会と移民の共生を「宗教多元化」を措定したうえで、宗教・宗派・教派の壁を超え、宗教組織内と宗教組織外において「多文化共生」をいかに実現するかと提示されてきたが、これは制度宗教に有効であっても、本研究が扱う華人の民俗宗教（民間信仰、民俗宗教）には通用し難いという。そのうえで、華人の民俗宗教が持っていた血縁、地縁、民族性に基づく共同体が、移民先のホスト社会においてどのように再編されているのかを明らかにすることを本論文の課題とした。各章の事例と具体的な研究課題の対応は次の通りである。

①第2章、中国福建省陳厝村の事例。共通な血縁、地縁を有する人々の間で、華人の民族宗教は離脱状態の血縁、地縁をいかに再構築するのか。

②第3章、日本神戸普度勝会の事例。共通な血縁、地縁、民族性を有しない人たちとの間で、ホスト社会の宗教文化と対立しないかつホスト社会は強い宗教価値観を有しない場合、華人の民族宗教はホスト社会といかに交流するのか。

③第4章、タイの菜食実践の事例。共通な血縁、地縁、民族性を有しない人たちとの間で、ホスト社会の宗教文化と対立しないかつホスト社会は強い宗教価値観を有する場合、華人の民族宗教はホスト社会にいかに受容してもらうのか。

④第5章、マレーシアの華人ムスリムの事例。共通な血縁、地縁、民族性を有しない人たちとの間で、ホスト社会の宗教文化と対立する場合、ホスト社会の異民族といかに認め合うのか。

以下、各章の内容を要約する。

第2章では2つの事例を扱う。①福建省陳厝村における陳氏宗族の宗親会による祖先崇拜は宗族をヒエラルキー的に統合する機能を果たしている一方、神祇祭祀においては宗族全体の神「聞太師」と、房レベルの神が共に村落を巡る「遊神賽会」により、宗族全員が統合されることを示した。②家庭仏堂（一貫道）の活動は、宗族につながらない人々にも精神的紐帯や助け合いを提供する可能性が見出せた。

第3章では、普度勝会の運営は福建省出身者が担っているほか、地域の人も閩帝廟に集まり、翌日の謝宴には福建同郷会のほか、中国駐大阪領事館、中華会館、中華同文学堂、広東同郷会、町内会などの普度勝会の開催に協力した華人組織や神戸地域の日本人団体が集まり、交流親睦が促進されている。普度勝会という中国民間信仰の祭祀儀礼は、人々の信仰心、ネットワーク、文化的アイデンティティを介

して、同郷人、中国人、神戸人といった重層的な帰属意識を持つ人々の中に浸透してきたことが示された。

第4章では、ピサヌローク県の「西天仏堂」における菜食（「ギンジェ」）参加者とプーケットで開催されたベジタリアン・フェスティバル参加者を対象に、参与観察やインタビュー調査を実施した。華人の、民俗宗教が仏教やタンブンの要素があるとタイ人に理解され、都市化・産業化に伴う私的救済のニーズが拡大されている中に、華人の、民俗宗教はタイ社会の精霊信仰の代替物としてタイ人に受け入れられているという知見を得た。

第5章では、第7回世界価値観調査マレーシア調査のデータ分析を通じて、マレーシアにおける民族・宗教間の差異が異なる現れ方を有することを確認し、華人がイスラーム教に入信（改宗）することによって社会における不利な状況が改善されるという仮説が成り立たないにもかかわらず、①制度上には、優遇政策の対象にならないが、日常生活における便宜なことがある、②入信（改宗）した本人の民族が変わらないため、優遇の対象にならない。しかし、マレー人と結婚した場合、子供がブミプトラとなり、優遇の対象になれる、③コーランの勉強やイスラーム教の聖職者になることによって、華人ムスリムは自分たちの権利のために能動的に獲得することが可能であるということで改宗者が出ていることが示された。

第6章は結論と課題である。国際社会学において異民族間の関係は、同化主義、排他主義への批判から、多文化主義、そして間多文化主義の概念が提起されてきた。本研究では、多文化主義や間多文化主義とは異なる形の関わり方を見出した。本稿の知見は移民の宗教とホスト国の宗教を区別せず、移民とホスト国の住民と一緒に新たな宗教的コンテクストを再構成し、相手の宗教ではなく、〈われわれの宗教〉として受入れている。これは、同化主義や多文化主義とは異なって、一方の宗教文化が他方に侵食されたのでもない、それぞれの宗教文化がそれぞれに原型を保っているわけでもない。これは、現地の伝統と創造的に融合して、新たな形態が生み出される融合であり、著者はクレオール化という主張をなしている。そのうえで、血縁、地縁、民族にこだわらず、共通な目的、宗教的なニーズによって1つのコミュニティに包摂される状況を、根源的な多様性の承認と親和的な関係にある「万物の生々流転」と認識し、東アジアの現代社会における民族宗教のダイナミズムとして把握したのである。